



室蘭工業大学

学術資源アーカイブ

Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive



Blake の A Vision of the Last Judgment について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2009-03-12 キーワード (Ja): キーワード (En): the Last Judgment, Jesus, Satan, Forgiveness of Sin, Continual Forgiveness of Sin 作成者: 安藤, 栄子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/433

Blake の *A Vision of the Last Judgment* について

安藤 栄子*

On Blake's *A Vision of the Last Judgment*

Eiko ANDO

(原稿受付日 平成 20 年 6 月 20 日 論文受理日 平成 20 年 11 月 7 日)

Abstract

We can see Jesus' mercifulness and Forgiveness of Sin in "The Woman Caught in Adultery" in the Gospel according to John. In the Revelation, however, we cannot but feel the strictness of Jesus as a Judge. There is no Forgiveness of Sin here. Blake seemed to feel something confusing in Jesus' contradictory facets in the Bible and moreover, to understand it was wrong. Therefore, he decided to correct the Bible by writing *A Vision of the Last Judgment*. Blake boldly regarded Jesus in the Revelation as Satan. Blake's Jesus seemed to demand the Bible's Jesus to commit self-denial. The Bible's Jesus shows Forgiveness of Sin, but it appears not to be perfect to Blake. Blake's Jesus shows Continual Forgiveness of Sin which means to forgive others, continually, and through doing this, to realize a world of absolute love and harmony.

Key words : the Last Judgment, Jesus, Satan, Forgiveness of Sin, Continual Forgiveness of Sin

序

The Gospel according to John の "The Woman Caught in Adultery" (8:1-11) では、姦通の現場で捕らえられた女を Jesus の所に連行した律法学者やファリサイ派の人々が、モーゼの掟に従い、石打ちの刑に処すよう促すが、Jesus は彼らの非情な手から女を救い、その罪を赦す場面が描かれている。多くの読者はこの話に感動するのであり、Jesus が示した「罪の赦し」という教えに深い感銘を覚えるのであろう。西欧基督教文化の中で育まれた W. Blake も同様であり、この福音書に基づいて

"The woman taken in Adultery" (1800-1805) という見事な絵を残した¹⁾。

ところで新約聖書の終わりに置かれる The Revelation to John には、先にあげた温かで穏やかな Jesus は消え、代わりに此の世の悪は一切許さず、罪人は地獄の責め苦にあわすことも辞さない厳格な審判者 Jesus が登場する。短絡的な言い方をすれば、聖書では罪を赦す Jesus と罪を罰する Jesus が描き分けられており、それが教義として当然とされてきたように思われる。

しかしながらこの「描き分け」について Blake は違う考えを示したようなのである。大預言書の代表作 *Jerusalem* (1804 - 1820) には "The long sufferings of God are not for

* 共通講座

ever: there is a Judgment.”(K620)という一行がある。その前の数行から推測すると神は人間の墮落に苦悩するが、すぐに「最後の審判」が起こり問題は解決するというのである²⁾。そのすぐ後に置かれる第3プレートでは“The Spirit of Jesus is continual forgiveness of Sin”と「罪の継続的な絶えず繰り返される赦し」こそはイエスの精神であることが述べられている(K621)。基督教では「罪の赦し」と「最後の審判」とが Jesus の矛盾する二面性を表すように感じられるのに対して、Blake の場合は「最後の審判」と「罪の赦し」とは矛盾せずに関連しているように感じられるのである。これはどのようなことであろうか。このことを解決する糸口は *Jerusalem* を書き進めていく最中に書かれた *A Vision of the Last Judgment* (1810)の中にあるように思われる。この小論ではこの点を追求したい。

1. Revelation における最後の審判

The Revelation to John (以下 Revelation と略す)はローマ帝国の基督教会への弾圧が最大であった1世紀頃、流刑地パトモス島にいた John は、恐るべき強さを誇る Jesus を幻視する。そして Jesus の命令でアジア州にある7つの教会に宛てた手紙を書いたのである。ローマ帝国による耐え難い弾圧に耐え、教会内に忍び寄るグノーシス派という異端信仰を排除するよことの諫めの手紙であった。そして天まで引き上げられた John は神の玉座とその周囲を囲む奇怪な4つの生き物達(獅子のようなもの、若い雄牛のようなもの、人間のような顔をもつもの、鷲のようなもの)そして24人の長老達が神を賛美し、礼拝するのを目撃する。John は7つの封印のある巻物を子羊が神から受け取り一つずつ封印を解く度に地上に様々な災難が降りかかるのを間近で目撃する。そして Jesus が天使達による地上の破壊戦略を目論んでいることを知る。此の世の悪は必ず全滅し、Jesus は再臨すると全人類を善人と悪人とに二分し、それぞれを天国と地獄に送るといのである。それゆえに Jesus は John を通して各教会がすぐに悔い改めるよこと促すのである。

ところで Jesus による最後の審判と人類の二分化は The Gospel according to Matthew (25:31-32)においても言及される。

When the Son of Man comes as King and all the angels with him, he will sit on his royal throne, and the people of all the nations will be gathered before him. Then he will divide them into two groups, just as a shepherd separate the sheep from the goats. He will put the righteous people at the right and the others at his left.

ここでは王のように威厳のある Jesus が天使を連れて再臨し、羊飼いが羊と山羊とを分けるように善人と悪人とを

左右に振り分けると言われる。同じ内容が Revelation ではよりドラマチックな手法で描かれている。(20:11-15)

Then I saw a great white throne and the one who sits on it. Earth and heaven fled from his presence and were seen no more. And I saw the dead, great and small alike, standing before the throne. Books were opened, and then another book was opened, the book of living. The dead were judged according to what they had done, as recorded in the books. Then the sea gave up its dead. Death and the world of the dead also gave up the dead they held. And all were judged according to what they had done. Then death and the world of the dead were thrown into the lake of fire. (This lake of fire is the second death.) Those who did not have their name written in the book of living were thrown into the lake of fire. すなわち我々人類は、神の支配する新たなエルサレムに入るために、生きているものも死者もこれまでの行いにより判定されるのである。これが Jesus による最後の審判である。「命の書」に名前が記載されていない人は罪を犯した人、つまり悪人ということで裁かれ、火と硫黄の地獄に投げ込まれる運命にある。Jesus の掟に従い善行を積んだ善人のみが「命の書」に名前があり、天国へと入ることが可能なのである。

2. Blake の最後の審判

それでは Blake は最後の審判をどのように考えていたのだろうか。彼は *A Vision of the Last Judgment* (以下 *A Vision* と略す)の中で次のように述べる。

The Last Judgment (will be) when all those are Cast away who trouble Religion with Questions concerning Good & Evil or Eating of the Tree of those Knowledges or Reasonings which hinder the Vision of God, turning all into a Consuming Fire. When Imagination, Art & Science & all Intellectual Gifts, all Gifts of the Holy Ghost, are (despis'd del.) look'd upon as of no use & only Contention remains to Man, then the Last Judgment begins, & its Vision is seen by the (Imaginative Eye del.) of Every one according to the situation he holds (K604).

Blake によると「宗教」が善悪の二元論を基本とする道徳等に変質する時、そして理論が優位にたち、善悪では判断できない「想像力」、「芸術」、「聖霊に基づく様々な才能」が理論的ではないという理由から「無用なもの」の刻印を押され無視される時に、最後の審判は起こるとされる。Blake はまた“A Last Judgment is Necessary because Fools flourish.”(K612)「愚か者が繁栄する時に審判は起こる」とも言う。Blake はまた以下のようにも述べる。

This world of Imagination is the world of Eternity; it is the divine bosom into which we shall all go after the death of the Vegetated body. This World of Imagination is Infinite & Eternal, whereas the World of Generation, or Vegetation, is Finite & (for a small moment *del.*) Temporal (K605).

上の引用文には Imagination と Generation (Vegetation) と呼ばれる対立する二つの世界が描かれる。善悪、真偽の二元論中心の世界が Generation であるが、これは時空に拘束された、常に私利私欲のための争いが起こる偏狭な世界と言えよう。道徳や掟等はこの世界から生まれるのである。これに対して先の引用文の「宗教」は二元論を突破した時空を超えた所にある Imagination に属するのである。それこそは真実の世界、永遠の世界である。Imagination に覚醒するには“To Tirzah”に歌われるように“The Death of Jesus”による他はない。それは絶対的な自我の死、完全な自己否定の境地なのである。Blake の最後の審判が Imagination に属するとすれば、Revelation の最後の審判は Generation に属するのであり、両者は同じテーマを扱いながら異質の内容を提示するようだ。Blake は *The Marriage of Heaven and Hell* (1790-1793) を書き、地獄の回復、肉体の開放、情念と精力の賛美を歌い上げた。つまり Revelation が天国中心の伝統的な基督教に止まるのに対し、Blake は地獄も天国も共に救われなければならないという極めて斬新な宗教を我々に示そうとしているのではないかと。

3. Blake の絵画(1)

それでは Blake が実際に *A Vision* の中で彼の最後の審判をどのように展開したのかをテキストと絵とを参考に述べていこうと思う³⁾。審判の中心人物 Jesus は次のように描かれる。

Jesus seated between the Two Pillars, Jachin & Boaz, with the Word of divine Revelation on his knees, & on each side the four & twenty Elders sitting in judgment (K606);

Solomon の神殿前の 2 本の柱 Jachin と Boaz の間に Jesus は座すとされる⁴⁾。膝の上には“the Word of divine Revelation”「聖なる啓示の言葉」と言われる本が開かれている。これには何が書かれているのか。おそらく伝統的な基督教徒が驚愕する内容であろうと考えられる。Blake の最後の審判が Revelation のそれとは異質であることは既に述べた。Blake の Jesus の再臨は以下のような意味を持つ。

Christ comes, as he came at first, to deliver those who were bound under Knave, not to deliver the Knave. He comes to deliver Man, the Accused, & not Satan, the Accuser. We do not find any where that Satan is accused of Sin; he is only

accused of Unbelief & thereby drawing Man into Sin that he may accuse him. Such is the Last Judgment a deliverance from Satan's Accusation. Satan thinks that Sin is displeasing to God; he ought to know that Nothing is displeasing to God but unbelief & Eating of the Tree of Knowledge of Good & Evil (K615).

Revelation の Jesus は罪を裁く目的で再臨する。これに対して Blake の Jesus は裁かれた罪人を救うために再臨するというのである。つまり Revelation と *A Vision* とが描く Jesus の性質は完全に正反対なのだ。Blake は Revelation の Jesus を Satan と呼び罪の告発者だと述べる。なぜなら告発すること、裁くことは善悪の二元論を基本とする Generation (Vegetation) の世界から生み出される偏狭な思考であり、Blake からみると Revelation の Jesus は救世主ではなく悪魔そのものであると思えたのであろう。

Blake の Jesus の座す玉座の周囲には眩い光が溢れており、その光の中で無邪気な幼児達が乱舞するのが見られる。彼らは Jesus の無心さの象徴のようだ。Jesus の頭上には太陽のような聖霊が置かれ⁵⁾、両側には 2 人の天使が見られる⁶⁾。絵の右手には地獄に落ちるものが描かれ、左手には玉座に向かい上昇するものが描かれる。

玉座のすぐ下には審判を待つ一組の男女がいる。彼らは我々の祖先である Adam と Eve である。彼女の足下から Abel を殺害した Cain が火打ち石を手にしたまま逆さまに落ちていくのが見える⁷⁾。蛇の尾に巻き付けられた Satan が逆さまに落下する。蛇の長大な体はそれに絡みつく十字架に釘付けされて十字架と共に落ちていくのだ⁸⁾。Satan の化身と思われる蛇は Adam と Eve とを誘惑し、原罪を犯させた張本人である。その蛇が落ちてゆくということは、Adam と Eve とが置かれた絵の高さから判断すると二人は原罪を免れたことを表したのではないかと想像できる。

それでは蛇と共に落下する十字架について考えてみたい。言うまでもないことだが、十字架は基督教会にとって恥辱と栄光のシンボルである。神の一人子 Jesus は十字架上で辱めと苦しみを受けて死んだが、3 日目に甦ることで死と罪とに打ち勝ち、原罪により断たれていた神と人間とを和解させることに成功したからである。基督教では Jesus の死は贖罪死である。すなわち神が全人類の罪を背負い、十字架上に死ぬことで罪を贖ったのである。このように十字架は厳粛な意味合いを帯びているのである。Blake も当然のことながらこのことは熟知していたはずだ。Blake は実は *A Vision of the Last Judgment* という同じタイトルの絵を二枚描いている。最初のは 1808 年の作品であるが、それには十字架が玉座の上に描かれてあった⁹⁾。しかしながら 1810 年に描いた時には十字架は不

要の物のように落下させられたのであり、その空白を埋めるために聖霊が置かれたのである。Blake は Jesus の死を無比なる自己否定と考えており、贖罪死とは考えない¹⁰⁾。自己否定を表すためには十字架を描くことは不要であると画家 Blake は考えたようだ。基督教教会の中心に掲げられる十字架は、見る者の心に神は自分を含む人類のために犠牲となったことを永遠に記憶に留める効果があると思われる。そのことは人間に神への絶対的な服従を当然のこととし、神の定めた掟を遵守できぬ場合は処罰されることが正当だと思わせることになると言えよう。つまり Revelation のあの威圧的な Jesus の下す審判も正当と受け入れられることになるのだ。さらにはこのことは基督教における神と人間との関係が関わるようだ。神は創造者であり、人間は被造物にすぎない。両者は支配者と被支配者の関係にあり、謙虚に服従する以外ないと思われる。これに対し、Blake の場合は異なる。神は常に人間と共にいて “‘I am in you and you in me, mutual in love divine’”と語りかけ、“‘I am not a God afar off, I am a brother and friend; / Within your bosoms I reside, and you reside in me.’”(K622)と親しく語りかけるのである。神と人間との関係は親子、兄弟、姉妹、友人のような絶ちがたい温かな交わりの中にあるのだ。それは罪から開放された喜びに満ちた「十字架のない基督教」とも言うべき革新的な Blake の宗教なのである。

さて「罪」が、「死」が、そして「時間」が落下してゆく。「残酷な掟」も落ちて行く。“beneath the falling figure of Cain, is Moses casting his tablets of stone into the deeps.”(K607)と言われるように Moses が血迷ったかのように十戒のきざまれてある石板を地獄めがけて落とす¹¹⁾。これは一大事である。なぜなら十戒と Moses とは密接不可分な関係にあるからだ。にもかかわらず石板を放棄するとは Moses が掟から開放されて自由となったことを意味すると思われる。これは聖書にはない Blake 独自の解釈である。Blake は上の引用に続けて“it ought to be understood that the Persons, Moses & Abraham, are not here meant, but the States Signified by those Names”(K607)と述べる。つまり Moses は、聖書で言及される十戒に拘束された偏狭な人間を指すのではなく、そのような人間でも真理に目覚めることで柔軟な心を取り戻すことが可能であることを示す「状態」を意味すると考えられるのではないか。これとは対照的に絵の右端には“the Pharisees are pleading their own Righteousness”(K612)と言われるように十戒を重視するファリサイ派の人々が、自らの正しさを玉座に向かい一心に主張する様子が見られる。しかしながら皮肉なことに、天使が「怒りの鉢」からまき散らす「3つの災難」に遮られてその主張は Jesus の耳には届かないのである。罪人を見下し、自分だけの正しさを主張す

る偽善者の愚かさ、空虚さが浮かびあがるようだ。

ところで玉座の真下には洞窟がある。その中には「7つの頭と10本の角を持つ竜」がいるが、その両足は鎖に繋がれている¹²⁾。竜は Revelation では Satan の化身であり、陣痛に苦しむ女の前に立ちほだかり、生まれ出ようとする赤子を食べようとする。一方 *A Vision* においても竜は Satan の化身と言えよう。しかしその意味は正反対なのである。*A Vision* の竜の前方に“Satan’s book of Accusation”と呼ばれる「告発の本」が無造作に投げ出されている。つまり *A Vision* の竜は罪の告発者であり、審判者である。すなわち Revelation の Jesus その人を指すのである。Revelation においては竜は Jesus に倒される悪の象徴である。竜の洞窟の上に一人の裸体の女が座る。Revelation では「バビロンの大妖婦」と呼ばれ王や商人にもてはやされたが、最後には裏切られて殺される運命の女である。Blake はこの女を“Mystery”「神秘」と呼ぶが、それは Satan を神として崇拝する「偽りの宗教」を意味するのである¹³⁾。すなわち罪を罰するが、罪を赦すことのできないきわめて未熟で偏狭な宗教であり、それは道德とでも呼べるものである。

4. Blake の絵画(2)

次に地獄の底辺近くを観察しよう。Jesus を処刑した大祭司 Caiaphas とローマ総督 Pilate とが描かれる¹⁴⁾。しかしながら彼らは歴史上の人物を表すのではないのである。これはこの作品に登場する旧約の族長の名前がその人物を意味するのではないのと同じことである。Blake は“these are Caiaphas & Pilate --Two States where all those reside who Calumniate & Murder under Pretence of Holiness & Justice”(K608)と述べる。すなわち彼らは「神聖さ」と「正義」という美しい仮面をつけ平然と殺人をやっている人間の心の「残忍さ」という「状態」をあらわすのである。Blake が考えた「状態」は、彼らのような残虐非道を行う人間でも覚醒することが可能であることを予期させる最良の方便であるようだ。Blake は異端審問の残酷さと残忍な教会について“The Figure dragging up a Woman by her hair represents the Inquisition, as do those contending on the sides of the Pit, & in Particular the Man strangling two women represents a Cruel Church.”(K608)と述べている¹⁵⁾。ローマ・カトリック教会を始めとする多くの基督教諸派は正統の教義から逸脱するものを異端として告発し、拷問責めにしたのであった。Blake は正統派が見せる異端への不寛容さに我慢できなかったのであり、これをあえて黙認する教皇へも大いなる不満を募らせたことは想像に難くない。Revelation で示される異端者、離反者への容赦ない処罰行為は、異端審問や掟中心の冷酷な教

会を生み出した母胎のようにも思える。

地獄の底辺には死体や墓があると想像できる。*Revelation* では地獄に落ちた者は二度と生き返ることはできないのである。しかしながら *A Vision* では“beneath the Dragon’s Cavern a Skelton begins to Animate starting into life at the Trumpet’s sound”(K609)と言われるように骸骨が甦るのである¹⁶⁾。骸骨に生命を吹き込んだのは天使のラッパの響きである。玉座から流れ落ちる火の川を4人の天使がラッパを吹きながら勢いよく下降するのである(K609)¹⁷⁾。*Revelation* ではラッパの音がするたびに地上を大地震、飢饉などが襲い、動揺と破壊とがもたらされたのであり、それはいわば不吉の兆しであった。しかしながら *A Vision* ではそれは反対に幸せの兆しと言えよう。なぜならそれは理性の地獄で禁欲生活の結果、精力、情熱すべてを否定し、骸骨と化した人間に再度精力を与え肉体を回復させるからである。地獄での再生が開始されるのに対応するかのように玉座の近くにいる天使が、“The Aged Figure with Wings, having a writing tablet & taking account of the numbers who arise, is The Angel of the Divine Presence mention’d in Exodus”(K610)と述べられるように、覚醒する者の数を数えるのである¹⁸⁾。天と地との共同作業の幕開けである。

神の選民であるイスラエル民族を蹂躪したためにヤハヴェの怒りの一撃を受けて倒れたバビロンを始めとする多くの異民族、異教徒も覚醒し活動を始めようとする(K608)¹⁹⁾。その側に“a Youthful couple are awaked by their Children”(K609)と表現される一組の夫婦が描かれる²⁰⁾。おそらくは戒律に拘束され、十分に肉体を解放せぬまま死の眠りについたが、今子供達の声に励まされて覚醒したのである。子供達は玉座の乱舞する幼児達と呼応し、Blake の Jesus の伝言である肉体の開放と情熱の復活を伝えたのであろう。Blake の預言書の主人公の Albion も禁欲生活で情熱を喪失し老人になったが、Britannia の温かな励ましに答えようと覚醒した(K609)²¹⁾。

5. Blake の絵画(3)

さて左側に目を向けると男女と思われる人物達の抱擁シーンが多くなる。エロスの力が増大したようだ。これらの多くは教会のある状態を示している。あの洞窟の側の抱擁する二人は“The Two Figures in purifying flames by the side of the dragon’s cavern represents the Latter state of the Church when on the verge of Perdition, yet protected by a Flaming Sword.”(K610)と言われる²²⁾。すなわち破滅寸前の教会がどうか愛を取り戻し、掟よりも罪の赦しを主体とする教会へと覚醒するようだ。次にはその近くに“Just above the graves & above the spot where the Infants

creep out of the Ground stand two, a Man & Woman; these are the Primitive Christians.”(K610)と言われるように二人の人物が両手を上げて何か喜びを表しているようだ²³⁾。これは「原始基督教徒」と言われる。当初から迫害にもめげず初心を貫いたことは見事であるが、Imagination に生きる Blake には律法中心の窮屈な教会のようであり、それゆえ墓場近くに置かれたが、未熟さを悟り、罪の赦しの真の教会へと目覚めるようだ。

ところで玉座に向かう上昇の流れには旧約聖書からの人物名が多く見られる。たとえば Abraham, Noah, Shem, Japhet, Seth 等である。彼らは新約聖書等からの人物達と共に Blake の「27の独善的基督教会」を象徴するのである²⁴⁾。つまり Blake から見ると彼らは未だ不完全な教会を表すのであろう。ではなぜ基督教会がユダヤ教と深い関わりを持つ旧約聖書の人物と関連づけられるのか。Abraham, Noah はヤハヴェへの篤い信仰に生きた純粋な人々であった。Abraham は信仰の深さゆえに神の命令ならば、大切な一人息子を犠牲に捧げようとしたのである。Noah も信仰の深さゆえ洪水の被害を一族と共に免れることができた。しかしその後息子 Shem の子が犯した過ちを頑なに許そうとはせず、呪いをかけることで一族分裂の乱れをもたらしたのである。Blake は彼ら的人身供犠を行ったと恐れられる Druids と同一視する。Blake は、たとえ自分の息子であれ、人間を犠牲にしたり、呪いをかける行為は真実の信仰とはほど遠いと考えたのであろう。そこから Abraham, Noah の名前は頑迷固陋な基督教会を表すと考えられるのである。それではこのような不完全な教会がなぜ玉座に向かうのか。既述したように、Moses, Abraham は旧約時代に生きた人物を表すというよりは、その名前により示される“States”「状態」を表すのである。

Blake は Beulah の娘達の嘆きを通し、「状態」の創造と罪からの開放とを“Descend, O Lamb of God, & take away the imputation of Sin by the creation of States & the deliverance of Individuals Evermore.”(K648)と述べる。Moses, Abraham, Noah 等は頑迷固陋な基督教会を表した。しかしながら彼らはその状態に止まるだけではない。彼らは最高の世界に飛翔し覚醒しうるのである。つまり「状態」は「罪の赦し」という我々の最終目的が実現される「回心の場」と言えるのではないか。Noah は二人の息子の間に置かれる。そして“these three Persons represent Poetry, Painting & Music, these Powers in Man of conversing with Paradise, which the flood did not Sweep away”(K609)と言われる²⁵⁾。Noah の回心の結果、頑迷だった教会は永遠界と交信できる芸術を理解できる柔軟性に富む豊かな精神の教会へと変貌したのだ。かつては Noah のように「独善的教会」に教えられた Seth

(Agamの第3子)は、ここでは“*This State call'd Seth is Male & Female in a higher state of Happiness & wisdom than Noah, being nearer the State of Innocence.*” (K611)と言われる²⁶⁾。すなわちSethはNoah以上に平安と知恵の高い状態にあり、それは無心の境地に達した教会を表すと思われる。

玉座近くに興味深い教会が置かれてある。それは子供に囲まれた一人の女性で表される。

Above Noah is the Church Universal, represented by a Woman Surrounded by Infants. There is such a State in Eternity; it is composed of the Innocent civilized Heathen & the uncivilized Savage, who having not the Law, do by Nature the things contain'd in the Law. This State appears like a Female crown'd with stars, driven into Wilderness; she has the moon under her feet (K609-610).

この女性は「普遍的教会」と呼ばれる²⁷⁾。この教会員はおそらく最もユニークだと思う。彼らは謙虚な基督教徒ではない。殺戮を繰返し、調和とはまるで無関係に見える「蛮族」と「異教徒」である。それではこの自由奔放な彼らはどのように融合されるのか。彼らは「掟」に支配されず、自然体で行動するが、彼らの精神の無意識な奔放の中にBlakeはImaginationへの覚醒を主張したのである。彼はそれを「同愛」と呼ぶが、この愛こそはすべての人に開かれる教会の本来の愛の姿のようだ。

さて新約聖書からは「受胎告知」で有名なVirgin Maryへの言及がある。

Around Noah & beneath him are various figures Risen into the Air; among these are Three females, representing those who are not of the dead but of those found alive at the Last Judgment; they appear to be innocently gay & thoughtless, not being among the condemn'd because ignorant of crime in the midst of a corrupted Age; the Virgin Mary was of this Class (K610).

「腐敗した時代にありながら罪を犯さず、したがって咎められることもなく無思慮で陽気に見える人々」の中にVirgin Maryはいるのである²⁸⁾。Michelangeloの最後の審判の絵には手と足に釘あとの生々しいが若々しい審判者Jesusが中央に描かれ、Maryはそのすぐ側に寄り添うように描かれる。多くの芸術家がMaryに並々ならぬ思いを抱くのは昔も現代も変わらない気持ちであろう。Virgin Maryに関しては「無原罪 懐胎説」「聖母被昇天」等の教義がある。しかしBlake自身はそのような教義にはほとんど関心をもたなかったようだ。彼はVirgin MaryがMary Magdaleneのような女性であったとしてもJesusの母として受け入れることができたようである²⁹⁾。この「陽気で無思慮」な女性達は絵では比較的不鮮明に描かれる。このことがかえって彼女らの前方を男性に抱

かれようと勢いよく下降してくる一人の女性の躍動感を際立たせるようだ³⁰⁾。

A Mother Meets her numerous Family in the Arms of their Father; these are representations of the Greek Learned & Wise, as also of those of other Nations, such as Egypt & Babylon in which were multitudes who shall meet the Lord coming in the Clouds (K610).

一人の母親が父親の腕に抱かれる無数の家族に会うと言う。その無数の家族とは学識があり賢いギリシャ人、エジプト人、そしてバビロンの人々だと言われる。言い換えると、異教徒達である。彼らはBlakeが理想とする既述した「普遍的教会」の構成員の蛮族と異教徒達でもある。Blakeは、「罪の赦し」は教義を優位におく信者よりも掟も教義も知らない異教徒の奔放な情熱と自由な生活のうちによりよく実現されていると確信しているようである。

Revelationでは教義を無視し、自由奔放に行動する異教徒は天国には入ることは出来ないのである。

Revelationでは

One of the elders asked me, “Who are these people dressed in white robes, and where do they come from?”

“I don't know, sir. You do.” I answered.

He said to me, “These are the people who have come safely through the terrible persecution. They have washed their robes and made them white with the blood of the Lamb.” (7:13-14)

と言われるように天国に入ることの出来る人々は上の“the terrible persecution”が示唆するように数々の迫害に耐え幾多の苦難を乗り越えた殉教者のような人々であろう。彼らは自らの情念や欲望を抑圧することができる強靱な精神の持ち主である。これに対しBlakeは以下のように述べる。

Men are admitted into Heaven not because they have curbed & govern'd their Passions or have no Passions, but because they have Cultivated their Understandings. The Treasures of Heaven are not Negations of Passions, but Realities of Intellect, from which all the Passions Emanate Uncurbed in their Eternal Glory. The Fool shall not enter into Heaven let him be ever so Holy. Holiness is not The Price of Entrance into Heaven (K615).

すなわちBlakeは情念を抑圧し、「神聖な」顔つきをしてみせても心が冷酷ならば天国に入ることは不可能であること、そして情念も肉体も十分に開放することが重要であると主張するのである。

結び

序文で一方では姦通罪の女の罪を赦しながら、他方

では罪人を裁く聖書の Jesus の矛盾する二面性に Blake は違和感を覚え、聖書の Jesus に疑惑を持ったのではないかという仮説を立てた。Blake は「裁く」という厳しい態度を善悪の二元論を超克できない未熟な精神界の特質と考えた。聖書では最後の審判は裁く Jesus を強調する。これに対し Blake の最後の審判は「罪の継続的な絶えず繰り返される赦し」を意味するのである。*A Vision* 中では此の真実の赦しを目指す教会の革新が叫ばれ、その変貌する姿が力強く描かれたと思われる。極論を許していただければ、*A Vision* の Jesus は Revelation の Jesus に「自己否定」を要求したのである。Jesus が偏狭な心を捨て、すべての人間を無条件で受け入れるようにとせまったのである。西洋の批評家のほとんどは Blake の最後の審判のこの独自性を見落としているようだ。神は愛である。しかし同時に神の義が全うされなければならない。教義としてこの二つが別々に立てられるのはやむを得ない。しかしその義が愛とはなれて掟として示される時、それは冷たい道徳律となる。なぜなら神の愛と義とは全く同じもの、一つのものであり、人間が無限の赦しを実践しようとするところに神の義も又あらわれるからである。すなわち Blake は彼の「罪の赦し」が憎悪、復讐などという相対的なものに対する二元的な愛ではなく絶対的な愛であると言いたいのである。

親鸞は「善人なをもて往生をとぐ、ましていはんや悪人をや」と述べ、悪人の救いを強調した。Imagination に目覚めた Blake にとって善人悪人の区分はないのであり、また基督教徒、異教徒、仏教徒の区別もないのである。あくまですべての人間が「罪の赦し」を実践しようとするところに自ずから現れる調和の世界の実現を *A Vision* の中で Blake は主張したと言えると思う。

註

聖書は旧約聖書続編つき新共同訳(日本聖書協会 1997)及び聖書 和英対照(日本聖書協会 1998)を使用した。

Blake の作品からの引用は全て Geoffrey Keynes ed., *Blake: Complete Writings with Variant Readings* (London: Oxford Press, 1969) による。たとえば文中で (K22) とあるのは引用された Blake の作品がこの版の 22 ページにあることを示す。

- 1) Milton Klonsky, *William Blake: The Seer and His Visions* (New York: Harmony Books, 1977), p.72.
- 2) His Sublime & Pathos become Two Rocks fix'd in the Earth; / His reason, , his Spectrous Power, covers them above.

/ Jerusalem his Emanation is a Stone laying beneath, (K620, 4-6) これらの数行は理性の横暴が人間の情念と知性、及び生命を枯渇させ、墮落させたことを暗示すると言えよう。

3) *A Vision* の絵は S. F. Damon の *A Blake Dictionary: The Ideas and Symbols of William Blake* (Providence, Rhode Island: Brown University Press, 1965) の巻末に収められているものを参考にした。Damon 氏はこの絵に描かれた人物、事柄等に1から81までの番号を付け、*A Vision* の本文に従い各項目を解説している (Key To “A Vision of The Last Judgment”).この小論の中で絵に言及する時は Damon 氏が付けた番号をたとえば Key No.21 のように記す。*A Vision* の絵を参考までに最後に載せる。

4) Key No.22.

5) Key No. 1.

6) Key No. 6 .

7) Key No. 24, 25.

8) Key No. 29, 30.

9) Morton D. Paley, *William Blake* (Phaidon Press Limited, Littlegate House, St Ebbe's Street, Oxford, 1978), plate no. 50. なお2枚の絵について Damon 氏は次のように述べている。“In the same year Blake painted for the Countess of Egremont a Last Judgment, which still hangs in Petworth Hall. Blake thanked the countess for the commission in a poem, “The Cavern of the Grave I’ve seen” (K558). Though it is only 19 7/8 by 15 3/4 inches, it contains hundreds of symbolic figures. Blake explained the chief of these figures in a letter to Ozias Humphry (K442). Above the figure of Christ the Veil of the Temple is opened, revealing the Cross in place of the Ark.

In 1810 he made the ink drawing of the Last Judgment now in the Rosenwald Collection (see Illustrations). A preliminary pencil sketch was reproduced by Keynes in the first Nonesuch edition of Blake’s works (1925, III, 148). *A Blake Dictionary*, p.235.

10) Jesus の死については拙著「To Tirzah」の意義(「北海道言語文化研究」第6号2008年、pp.95-103)を参照のこと。

11) Key No.37.

12) Key No.51.

13) S. F. Damon, *A Blake Dictionary*, p.291.

14) Key No.41, 42.

15) Key No.44, 46.

16) Key No.55.

17) Key. No.47.

18) Key No.12.

19) Key No.43.

- 20) Key No.56.
- 21) Key No.58.
- 22) Key No.57.
- 23) Key No. 59.
- 24) S. F. Damon, *A Blake Dictionary*, pp. 85-86.
- 25) Key No.68.
- 26) Key No.62.
- 27) Key No.64.
- 28) Key No.79.
- 29) Cf. *The Everlasting Gospel* の断片 i には Jesus の母は娼婦でもかまわないことが示唆される。
- 30) Key No.76.

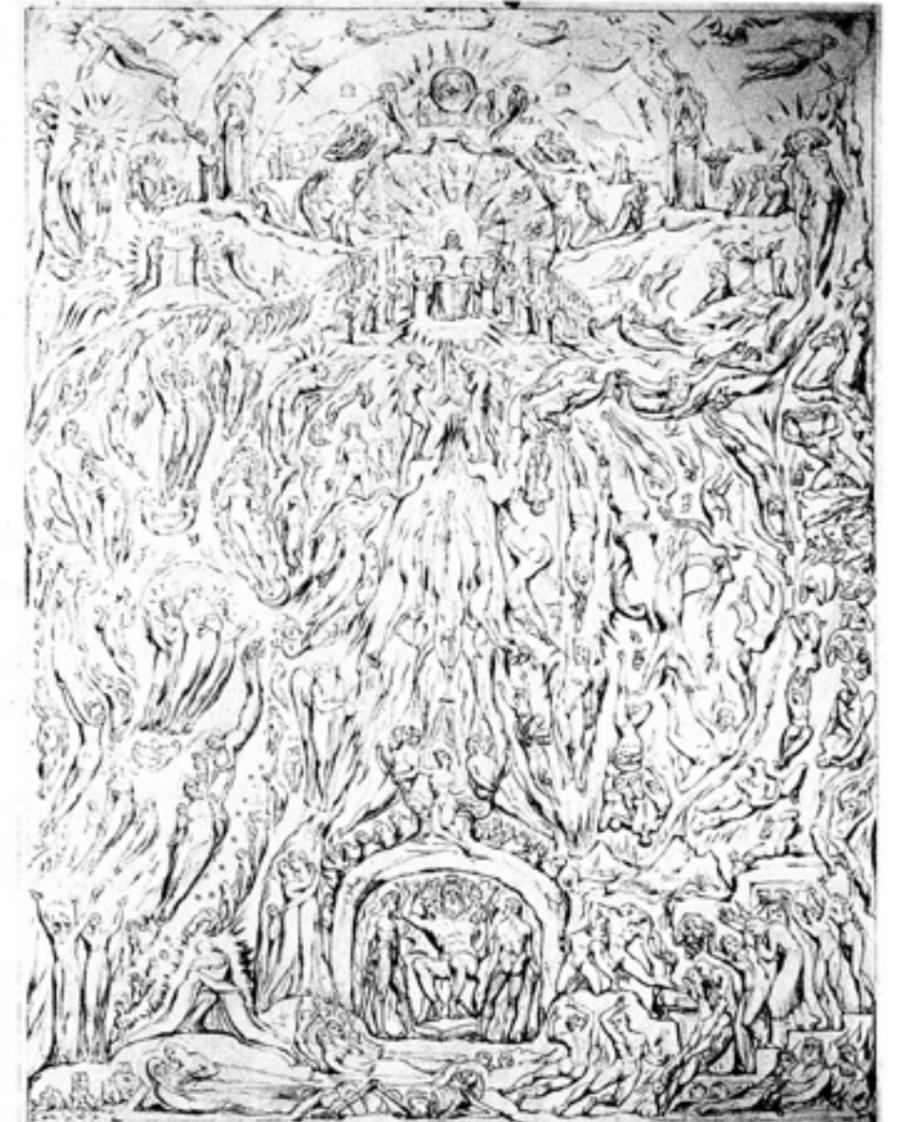
KEY TO 'A VISION OF THE LAST JUDGMENT'

1. The Holy Ghost
2. Glorification of angels with harps
3. The Candlestick
4. The Table of Shew-bread
5. The cherubim of the Ark
6. Infants; "these represent the Eternal Births of Intellect from the divine Humanity"
7. Baptism
8. Education ("Nursing Fathers & Nursing Mothers")
9. A Living Creature (a four-headed Zoa)
10. The Two Witnesses subduing their enemies
11. The Lord's Supper
12. The Angel of the Divine Presence, "having a writing tablet & taking account of the numbers who arise . . . is frequently call'd by the Name of Jehovah Elohim"
13. The Holy Family ("Mary, Joseph, John the Baptist, Zacharias & Elizabeth")
14. A Living Creature "on the Left of the Throne Gives to the Seven Angels the Seven Vials of the wrath of God"
15. A woman with children fleeing from the Wrath; "these represent those who, tho' willing, were too weak to Reject Error without the Assistance & Countenance of those Already in the Truth"
16. Michael
17. Apollyon, "foiled before the Sword of Michael"
18. The Book of Life
19. Three figures bowing in humiliation before the record of their good deeds
20. The Book of Death, uttering "Lightnings & tempests"
21. Two Pharisees "who plead their own Righteousness before the throne"
22. Jachin and Boaz
23. The Four and Twenty Elders "sitting in judgment"
24. Adam
25. Eve
26. Three plagues poured from the Vials of Wrath: Labor, Materialism, and Hate
27. Cain, "falling with the head downward"
28. Arannah casting out the chaff, "the vanities of Riches & Worldly Honours"
29. The Cross, on which the Serpent is nailed
30. Satan, wound round by the Serpent
31. Eliakim, the Son of Hilkiah, who "drags Satan down headlong"
32. Sin, dragged down by the hair by a demon with a key
33. Death, dragged down by a demon
34. Time, dragged down by the same demon
35. Og, king of Bashan, with the sword of Justice
36. Cruel laws, as "three fiery fiends with grey beards & scourges of fire"
37. Moses, "casting his tables of stone into the deeps"
38. A male and female, "chain'd together by the feet; they represent those who perish'd by the flood"
39. Hazael the Syrian, "a fiend with wings," who "urges the wicked onwards with fiery darts"; he "drives abroad all those who rebell against their Saviour"
40. Achitophel, with the cord in his hand
41. Caiaphas "has a Blue Flame like a Miter"
42. Pilate "has bloody hands that never can be cleansed"
43. Babylon and other kingdoms
44. The Inquisition, "dragging up a Woman by her hair"
45. The Inquisition; two men contending even on the brink of the Pit
46. A Cruel Church; a man strangling two women
47. Four Angels "descend headlong, with four trumpets to awake the dead"
48. "The Harlot nam'd Mystery in the Revelations"
49. Vegetative Existence ("Two Beings each with three heads")
50. Mystery's kings and counsellors
51. The Dragon with seven heads and ten horns
52. Satan's book of Accusations
53. Gog
54. Magog
55. The skeleton animating
56. "A Youthful couple . . . awak'd by their Children"
57. "The two Figures in purifying flames by the side of the dragon's cavern represents the Latter state of the Church when on the verge of Perdition, yet protected by a Flaming Sword"
58. Albion awak'd by Britannia
59. "A Man & Woman; these are the Primitive Christians"
60. Elijah; "he comprehends all the Prophetic Characters"
61. Abel, "surrounded by Innocents"
62. Seth. "This State call'd Seth is Male & Female in a higher state of Happiness & wisdom than Noah, being nearer the State of Innocence . . . The figures of Seth & his wife comprehends the Fathers before the flood & their Generations"
63. "The two Seasons of Spring & Autumn"
64. "The Church Universal as the Woman in the Wilderness. There is such a State in Eternity: it is composed of the Innocent civilized Heathen & the Uncivilized Savage, who, having not the Law, do by Nature the things contain'd in the Law"
65. "Between Seth & Elijah three Female Figures crown'd with Garlands Represent Learning & Science, which accompanied Adam out of Eden"
66. "Two figures, a Male & Female, with numerous Children; these represent those who were not in the Line of the Church, & yet were Saved from among the Antediluvians who Perished"
67. "A female figure represents the Solitary State of those who, previous to the Flood, walk'd with God"
68. Noah, with Shem and Japhet; "these three Persons represent Poetry, Painting & Music, the three Powers in Man of conversing with Paradise, which the flood did not Sweep away"
69. The Four Seasons, "the Changed State made by the flood"
70. Abraham
71. Hagar and Ishmael
72. "Jacob & his Twelve Sons hover beneath the feet of Abraham"
73. Abraham's Posterity. "The Children of Abraham, or Hebrew Church, are represented as a Stream of Figures, on which are seen Stars somewhat like the Milky way; they . . . Represent Religion, or Civilized Life such as it is in the Christian Church, who are the Offspring of the Hebrew"
74. "On the right hand of Noah, a Woman with Children Represents the State Call'd Laban the Syrian; it is the Remains of Civilization in the State from whence Abraham was taken"
75. "Three aged Men who appear as suddenly emerging from the blue sky for their help. These three Aged Men represent divine Providence as oppos'd to, & distinct from, divine vengeance, represented by three Aged men on the side of the Picture among the Wicked, with scourges of fire"
76. "A Mother Meets her numerous Family in the Arms of their Father; these are representations of the Greek Learned & Wise, as also of those of other Nations, such as Egypt & Babylon in which were multitudes who shall meet the Lord coming in the Clouds"
77. "On the right hand of Noah A Female descends to meet her Lover or Husband, representative of that Love call'd Friendship, which Looks for no other heaven than their Beloved & in him sees all reflected as in a Glass of Eternal Diamond"
78. Lovers reunited, or the Soul reunited with the Body
79. "Three Females, representing those who are not of the dead but of those found alive at the Last Judgment; they appear to be innocently gay & thoughtless, not being condemn'd because ignorant of crime in the midst of a corrupted Age; the Virgin Mary was of this class"
80. Mahomed, beneath Ishmael
81. The Seven Eyes of God



These identifications are made from A Vision of the Last Judgment (K 904-17). There are some discrepancies between the text and this picture. Only two of the Living Creatures are shown, and only three of the seven Vials of Wrath. Satan, though he has

coils about his waist, is not involved with the crucified Serpent; neither is Sin bound in the Serpent's folds. Death is not chained to the Cross. Some attributes are also omitted; for example, Og has his sword but not his balisars.



National Gallery of Art, Washington, D. C., Rosenwald Collection

A Vision of the Last Judgment